

東海道五十三次 てくてく歩く日帰り一人旅 太田康直

東海道五十三次 一知られざる穴場— その④

東海道で言えば、同じ静岡県ながら三島宿だけが伊豆の国で、次の沼津宿（12 番目）はもう駿河の国。だから三島大社は伊豆の一宮。三島はまた富士の湧き水の街。富士に積もった雪は溶けて地面にしみ込み、3 年かけて地下水脈を通り抜け、三島で湧き出して来る。市内の至る所の池や川に湧き出しているが、白滝公園内の池と周辺の遺跡は一見の価値がある。池の畔には湧水を汲み上げている二人の模型が屋根付きでしつらえてある。



（歌川広重 沼津宿）

公園周辺で目につくのは多彩な碑。まず「農兵節の記念碑」。幕末に農民で組織された農兵隊の歌が明治になって、三島の花柳界で替え歌になった。碑には歌詞の一節の「富士の白雪朝日に溶ける、三島女郎の化粧水」が刻まれている。ご存

知、昭和流行のお座敷唄「の一え節」の原型。他に、牧水の文学碑や子規の句碑。牧水は次の沼津にある自宅からと三島からの富士の見え方の違いを述べ、子規の句は前書きに「三島の町に入れば小川に菜を洗う女のさまもややなまめきて見ゆ」とあり、『面白やどの橋からも秋の不二』と詠む。

三島宿に東海道の遺跡はあるにはあるが、何れもうっかり見過ごしてしまうほど地味で小さい。三島宿問屋場跡の碑も、東海道を挟んで建っている三島宿世古本陣址と樋口本陣址の碑も、秋葉神社内の西見附跡の碑もとにかく小さい。そんな中で、三石神社内の「時の鐘」の説明板はしっかりしていて見逃しようはなかった。何でも江戸時代宿場の人々に明け六つと、暮れ六つを知らせていた由。さらに進むとそれは小さい境川があり、これが三島宿と沼津宿を、いや伊豆の国と駿河の国を分ける川であった。この境川の上流に大きな樋が架かっていた。千貫樋と言ひ、天文 24 年（1555）に今川、武田、北条の和睦があり、北条氏康の娘が今川氏真に嫁ぐ時の引き出物として、氏康が伊豆楽寿園内の小浜池から長堤を築き、その水を駿河に疎通させるために造った樋と

いう。関東大震災で崩壊してしまい、現在目にする樋はコンクリート製。

境川を越した少し先に道を挟んで宝池寺と玉井寺が向き合って建っている。両寺の前に盛り土の一里塚があり、2つ併せて伏見一里塚という。さらに進むと右側に長沢八幡宮があり、境内に対面石があった。治承4年（1180）、頼朝が挙兵したことを知り、奥州から駆けつけて来た義経と対面した時の2つの石だという。その先の潮音寺の本尊は亀鶴観音。曾我兄弟の仇討ちの時、討たれた工藤祐経と同衾していた白拍子亀鶴ゆかりの観音。

ところで沼津には宿場を偲ぶ史跡は皆無。大正2年の大火や戦災、戦後の道路拡張や区画整理で宿駅の面影を完全に消失してしまった。少し脇道にそれた所に広々とした松林の千本公園があり井上靖文学碑、若山牧水記念館や歌碑等がある。井上靖は旧制沼津中学時代にこの地で過ごし、牧水に至っては大正9年に沼津に居を構え、昭和3年に没するまで千本公園の伐採反対運動の先頭に立って頑張った由。公園への道すがらに浄土宗百万遍智恩寺派の乗運寺があり、法主の筆になる

「若山牧水の墓」が立っていた。蛇足ながら、沼津からは富士の左肩を愛鷹山が隠していて、三島からほどの景観はないと述べているのが、三島白滝公園池畔にある牧水文学碑の中の文章である。



（歌川広重 原宿）

次の原宿（13番目）は東海道五十三次の中で、一番富士を近くに見ることの出来る場所である。広重も「東海道五十三次」の中で、原宿から見た富士を「朝の富士」と題して画面いっぱいに大きく描いていて、まさしく富士が主役の宿場である。だが広重は右側に無骨な愛鷹山もちゃんと描きこんでいる。三島宿にあった牧水の文学碑の文章と広重の絵に見られる三宿（三島・沼津・原）三様の愛鷹山と富士の位置関係が面白い。

原宿のもう1つの見所と言えば、「駿河に過ぎたるものが2つあり、富士のお山に原の白隠」とまで言われていた白隠禅師（1685-1717）の出身地であり、隠遁の地でもある。彼は原宿で生まれ、15歳にして松蔭寺で得度。諸国を修行して歩き、京都妙心寺の第一坐となったが間もなく帰郷、松蔭寺の住持となった。臨済宗の名僧としてその名は天下に知れ渡っていたので、参勤交代などでこの地を通る際に、白隠禅師を訪ねる大名も多かったようである。松蔭寺内に白隠禅師のお墓の説明板とお墓がある。鈍行で旅する人にとっては、東海道はJR原駅の目の前を通っており便利な駅である。



（歌川広重 吉原宿）

次の吉原宿（14番目）は歌枕の「田子の浦」を抱えている宿場。しかし残念ながら現在の田子の

浦は吉原の貿易港として栄え、昔日の面影はなきに等しい。代わりに原宿内の JR 東田子の浦（原駅のすぐ西の普通停車駅）下車辺りからの富士の眺めが素晴らしい。愛鷹山の角度から推察して広重もこの辺りから原宿の「朝の富士」を描いたと思われる。余談だが山部赤人の歌が万葉集と百人一首（藤原定家編）とでテニオハに相違があることについては、興味のある向きは万葉仮名を少し齧っていただきたい。

広重の「左富士」は吉原宿からの図。広重の絵にちなんで左富士神社もある。でも前方の工場に邪魔されて全く見えない。ちなみに西へと旅する場合、普通は右側に見える富士が左に見えるポイントがあって、ここが平塚宿手前の「南湖左富士」の2ヶ所。その他の旧跡としては、水鳥の羽音に驚いた平家が戦わずして退却した富士川合戦跡地。現在の和田川の「平家越え橋」のたもとに碑も建っている。吉原本町の商店街に入ると「鯛屋旅館」があり、「次郎長鉄舟の定宿」とあった。両者の出会いについては府中宿の項で述べる。「水神ノ森と富士川渡船場跡」の史跡もある。東海道に渡し場が13ヶ所あり、6ヶ所は徒歩^{かちわたり}渡で7ヶ所が舟渡。前者の代表格は大井川。後者は七里の渡、富士川は後者の舟渡であった。



（歌川広重 蒲原宿）

さて富士川の鉄橋を渡ると間の宿、岩淵。大きく南下して蒲原宿（15番目）に入る。宿手前の枡形を右折すると富士川町役場があり、その前に「史跡一里塚」の碑と目印の榎木の大木が往時そのまま道の左右に残っていた。その先に蒲原宿東木戸跡の碑があり、蒲原宿問屋場跡、「蒲原夜之雪」の記念碑と続く。これは昭和35年の国際文通週間の記念切手の図柄として広重の絵が採用されたことを示す記念碑である。雪の図柄は他に「亀山・雪晴」があり、雨となると「大磯・虎が雨」、「庄野・白雨」、「土山・春之雨」があるが、旅人に厄介な雪や雨でも広重の手にかかる、情趣たっぷりの雰囲気を出している。さてその先蒲原宿本陣跡、蒲原宿高札場跡と続き、枡形を直角に左折すれば西木戸跡。ここで旧国道1号線と合流する。そのままおよそ3キロほど西進すると宿間の距離が御油宿・赤坂宿間（1.7キロ）に次いで2番目に短い次の宿場が待ち受けている。